

が熱くなった。

夕会は、敦賀フェリーターミナルで商店街組合・実行委員会の方々と食事をしながらの交流会であったが、意外にも若者の参加が多く、街づくり、地域づくりにかかわる思いがさわやかに伝わってきた。

食後外に出ると「敦賀シンボルロード」と名づけられた、マンガ家松本零士さんの作品があちらこちらにイルミネーションと共に設置されていて、不思議な世界が広がっていた。

議な世界が広がっていた。

2日目は氣比神宮、博物館通り（町家、紙わらべ資料館）を見学した。町家の改修、及びテナントミックス事業として外観を変えることで、ノスタルジックな街を演出してあり、観光地としての前向きな活動に心ひかれた。桐生の街なみも、古い街のイメージで取り組んでいることを思い出し、これからの活動に活かしていこうと思った。

小浜市・若狭町

第5分科会

伝統的な町並みを活かしたまちづくり

～ベンガラ格子が灯る町・小浜西組／鯖街道の宿場町・熊川宿～



街づくり市民ゼミナール 杉原 みち子さん

今回の視察研修は、感動、感動、感動の連続でした。全国大会へは高知大会（第14回）から参加していますが、新鮮でハイレベルな学びとなりました。

1日目に訪れた小浜西組は、100年後を見通す優秀なリーダーと地域を愛するフィロソフィーが確立されているため、考え方、行動プロセスがわかりやすく、とても内容の濃い充実した研修となりました。（フィロソフィー：ギリシア語で「愛」「知」という意味）

まず、マスタープランの一文「人は町にとって血液であり命そのものである」「私達がしなければならないのは『町のにぎわい』と『文化の継承』である」



という品格のある表現にしばれました。

また、一般に事例発表は代表のみということが多いのですが、常高寺では実行委員長のご住職が、不動産関係者、建築設計者、元教師、環境整備の方にお声をかけられ、それぞれ違った切り口から発言いただいたため、活動への理解が深まり、その発表の進め方からも学ばせていただきました。

夕闇の中の探訪では、生活の温もりが伝わってくる家並や一門一灯のあんどんとベンガラ格子の奥からもれる灯りの美しさにため息。かつて北前船で栄華を誇った旦那衆の粋な遊びが聞こえてきそうな艶っぽい“料亭たる井”など、三丁町界限ではタイムスリップしたような時空に身をゆだね、伝統の美を堪能させていただきました。

交流会場では女性群は和服にお色直しされ、同じ人とは思えないほどバージョンアップしていて、同性でも眩しいほどでした。さすが絹織物日本一と女性の社会進出No.1の福井県です。鯖尽くしのメニューによる「お・も・て・な・し」もあり、海なし県民の私は新鮮なお刺身を前に目も口となり夢中。若狭町長の森下様に「刺身は切るだけなので、我々は手のかかった物しか食べない」と私の食べっぷりを笑われましたが、食べ方もイロイロです。大

風呂も一人占めで大満足でした。

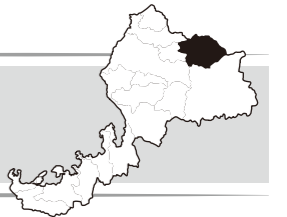
2日目の熊川宿では、すべての関係者が柔和で穏やかで、品格があり、ユーモアも加えて、生きることを楽しんでいらっしゃいました。究極のスローライフの中で歴史を生かし、工夫されていました。京都から1時間の地域なので熊川音頭からも京風の品が感じられ、田舎の臭いがしません。手造りコンニャクの唐揚げ、高校生考案のお弁当、本葛の質の高さ

勝山市

第7分科会

人と地域がキラリと光るまちづくり

～「恐竜渓谷ふくい勝山ジオパーク」からの発信～



前橋地域づくり連絡会 持田みね子さん

私は前橋市の中でもほんの小さなエリアで、地域づくりに関わりながら地域づくりのあり方進め方等に日々取り組んでおります。このような大会に参加することで今後の活動のヒントになればよいと、期待感でいっぱいでした。今回の福井大会の事前の資料を見て、「住民の力で町おこし」という部分が自分の目指していることにもっとも近いような気がして勝山分科会に参加することにしました。

当日、高崎駅で群馬県内で地域づくりに取り組む皆さんに出会い、車内での会話の中からも学ぶことがたくさんありました。

さて、現地に到着し県の人たちと別れ、勝山分科会のスケジュールでの行動が始まりました。参加メンバーは年齢も性別も様々で、それぞれの思いを持ちながら全国から集まっていました。

この勝山分科会では町の特長を活かし、みんなが元気になる町づくりを目指していました。勝山市は、福井県北東部のすぐ隣は石川県というところに位置し、人口は25,000人くらいです。山に囲まれた盆地で、冬季は積雪量が多く2～3mも積もるほどです。山間に田畑が広がり風光明媚で自然豊かな環境にあります。近年は人口の減少が著しく、少子化と過疎化が進んでいる状況で、「地域に定着し、

は福井県の食文化の高さを伝えてきました。おせんべい、和菓子、パンも質が高く、鄙の魅力を再発見。やはり食育は大切であり、本物の食物は本物の人間を育てるということを実感しました。

2日間を通して、丁稚羊羹の接待、そこここに活けられた季節の花々、丁寧なお見送りなど私にとって光り輝く人生の1ページとなりました。

また新たに人が定住する町」「他県から多くの人が訪れ地域産業を潤すような町」にしたいとの思いが強くありました。

その方策として採用していたのが、町全体を博物館と考えて進める「エコミュージアム構想」であり、地域の財産（遺産・伝統・産業 etc）を最大限に活かす町づくりです。それを基にしたいくつかの取り組みを見学しました。地域づくりの規模を考えると我が県桐生市の町おこしに似ているように思いました。住民一人ひとりが主体的に関わり地域独特の産業を振興させ、そこから利益を生み出す、地域づくりイコールビジネスです。そのビジネスの部分の

